

## 世界の人びとのための JICA 基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	「東ティモール村落部の給水施設における住民による主体的な維持管理への意識向上プロジェクト」(チャレンジ枠)
(2) 実施団体名	一般社団法人 Carrying Water Project
(3) 実施期間	2022年6月27日～2023年3月15日
(4) 実施国	東ティモール
(5) 活動地域	村部 エルメラ県ウラホー村
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>2016年～2018年において、福井県大野市の事業として、ユニセフを通じ東ティモールの村部で給水施設を建設する支援を実施した。その後、大野市による支援事業は終了したが、支援地第1号であるウラホー村へは、支援期間の4年間にわたり毎年視察を行ってきたことが功を奏し、給水施設等の維持管理の状況について、ユニセフを通じ村から自主的に大野市へ報告が届いていた。</p> <p>その中においては、例えば、盗水が横行しており給水施設に穴をあけて自分の家に水を引く人がいること、給水施設が壊れて修理する資金が無く放置してしまうこと、修理の部品が入手できず放置してしまうこと、水管理委員会のメンバーはボランティアであり維持管理を放棄してしまうなどの原因で、多くの村では数年で給水施設が使えなくなっていることが、ユニセフ等を通じた村民の声として明らかとなっている。また、給水施設が壊れたら、他の支援が来るのを待つといった支援に依存するメンタリティが蔓延している実態も明らかとなった。</p> <p>他方で、上記のとおり、給水施設の維持管理の側面で課題を抱えていることが認識されてきたが、市の事業としてはすでに終了しており、対応をする主体が存在していなかった。しかしながら、今般、これまでの市事業に深くかかわっていた官民の関係者が一般社団法人 Carrying Water Project (以下「一社CWP」) を設立し、東ティモールにおける水環境の向上を活動の一つの柱と置いたことにより、大野市事業による支援の後に残された課題に対応できる主体が整い、新たな活動を開始する土台が構築できた。</p> <p>そのことを踏まえ、今回の JICA 基金案件では、ウラホー村の村民による給水施設の維持や、水管理委員会による維持管理を確立することにより、村部における給水改善の維持管理手法を確立し、村部における給水改善のモデルとして活用・展開することを見据え、まずは現状の課題をしっかりと把握し、今後の活動の方向性を定めるための情報を収集するとともに、現状でも可能な技術指導や意識啓発などの取組を行うことで、水環境の向上に向けた取組を今後推進するための土台作りに着手することを目指した。</p>

## ②活動の目標：

村民らが協力し、自主的に給水施設の維持管理を行う意識を持つようになるために、給水施設維持管理に関する技術指導、水循環に関する意識啓発等を行う。

## 2. 業務実施結果：

### (1) 実施した内容

#### 【実施内容①】水管理委員会への技術指導

- ・大野市の水道事業者とウラホー村の水管理委員会メンバーと一緒に給水施設を点検し、水漏れ箇所に対する簡易な修繕や長寿命化などのメンテナンス作業を共に行うことを通じ、適切な修理方法を伝えた。
- ・同時に、現地での水管理委員会及び村民によるマネジメントの座組について、現状と課題について意見交換を行うことで、どのような改善を行えば自律的かつ持続的な設備メンテナンスが可能となるのかを分析するための情報収集等を試みた。
- ・その際には、東ティモールの技術者養成学校の講師やユニセフ現地事務所のスタッフにも同行いただき、上記の活動に参加いただくことで、今後教えるべき技術や考え方について、協力して検討を行った。

#### 【実施内容②】子供向けワークショップ

- ・現地の小学校において、管清工業株式会社と CWP とが共同で、水循環の大切さや水資源を守り、衛生環境の改善を図るために自分たちができることを学ぶ「出前講座」を開催した。
- ・また、水道施設の一つを選び、小学校の生徒等によるさび止めのペンキ塗りを行い、水道施設を自らの手で維持管理することへの意識を高めた。

#### 【実施内容③】情報発信

- ・管清工業株式会社と共同で、SDGs 等に関する取組を広く発信する展示会である「エコプロ 2022」に本活動の紹介ブースを設置し、世界の水問題に関する意識啓発や、東ティモールにおける活動の意義や重要性、概要や今後の展開について広く紹介した。
- ・また、金沢で開催された国際観光学シンポジウム「ICTS2023」にポスター展示を行い、本活動の学術的な意義について有識者に広く説明を行った。

## (2) 実施成果：

### 【実施内容①】水管理委員会への技術指導

・水管理委員会の技術担当者とともに、村の各所にある水漏れ箇所等を発見し、その場に適した修繕方法を実技も含めて伝えることにより、簡易的な修繕方法を伝達できた。9月渡航後のフォローアップを3月に行ったところ、エルメラ県の担当者からは、簡易的な方法については引き続き村の人々により実践できているとの情報を受けているところ。

・村の水道施設のメンテナンスの座組については、意見交換において、村民の責任意識の不足や、スケジュール管理等の意識の不足などの課題点のあぶり出しにはある程度の成果があった。ただ、改善策の提案までには至らず、フォローアップの際の情報においても、修繕の取組は可能な範囲での場当たりの対応に引き続きとどまっているとの報告を受けているため、今後の課題として認識している。

・ウラホー村に同行いただいた技術者養成学校の講師とは、現地での課題を共有し、水道技術人材の育成の必要性について意見交換等を行った。その結果として、CWPと管清工業とともに人材育成及び雇用創出に向けた取組を共同で開始することとなり、4月に東京において3機関による連携の覚書の締結に至った。

### 【実施内容②】子供向けワークショップ

・管清工業社員を講師とした水の出前講座においては、現地語に翻訳した意識啓発動画なども活用し、そもそも下水という概念を持たない段階である生徒たちに対して、水循環の重要性についての初歩的な理解を促すことができた。

・また、ペンキ塗り活動を通じ、簡易な作業であっても設備の保全には大きな効果があること、自分たちでもできることがあるということを認識させることができた。

・加えて、東ティモールの子供や村民の意識に即したコンテンツの検討・作成を通じ、管清工業やCWPメンバーの側でも様々な気づきを得ることにつながり、現地の事情に即した水環境の向上対策についての理解を深めることができた。

### 【実施内容③】情報発信

・「エコプロ2022」の管清工業ブースには、のべ6960人の来訪者があり、多くの方々に本活動の意義や内容等を伝えることができた。

・「ICTS2023」のポスター展示においては、参加しているポスター展示の中での最優秀賞を獲得するなど、本活動について高い評価を得ることができ、多くの研究者との間で本活動と連携した研究活動についての意見交換を行うことができた。

### (3) 得られた教訓など：

現場の村での活動や、首都における政府関係者等との意見交換を通じ、支援をして作りっぱなしにするのではなく、その後の維持管理までをどのように行っていくかを両国でともに考えていくという私たちのそもそもの目的が多くの方々の賛同をいただくことができ、活動においてたくさんの協力者に恵まれたことが、大変ありがたく感じられた。

満ち足りた先進国から「べき論」をかざすだけではなく、このような支援をいただきながら、小さくても行動を起こすことによって初めて、社会が動いていくものだというのを改めて学ぶことができた。

### (4) 今後の活動・フォローアップの方針：

CWPメンバーがすでに東ティモールに半常駐する形となっており、また職業訓練校との覚書の枠組みにおいて、研修生の受け入れや管清工業技術者の派遣など、具体的なアクションが予定されている。さらには金沢大学との共同研究の枠組みで、学生や教員の東ティモールでの活動も想定されており、これらの産学のパートナーと連携しつつ、村部における水環境の向上について、人材育成やインフラの研究開発、村民の意識啓発やマネジメントの在り方の検討など、様々な側面から引き続き取り組んでいきたい。

## 3. その他(エピソード・感想・写真など)

### (1) 活動中のエピソード・感想など

村の水管理委員会や村民との意見交換の場において、村人が負担金を払ってくれないと嘆く委員会の幹部に対して、CWPの水道技師から、「日本では水道の管理はビジネスとして行われている。皆さんもこれが仕事で、お金を生むとしたら是非やりたくないか、我々は皆さんとともにそういう「水道屋さん」をこの国で生み出し、水環境を良くしていきたいと思っている」と話をしたところ、委員会の面々が「それは是非やりたい」と目を輝かせていたことが、とても印象的であった。

### (2) 活動の写真



小学校での出前授業



小学校での出前授業（2）



ペンキ塗りをする小学生



ペンキ塗り後の集合写真



水管理委員会・村人との意見交換



実地での技術指導



手洗いの歌による実践活動



雇用・労働庁での意見交換



職業能力開発センターでの意見交換



3月のエルメラ県政府からの聞き取り



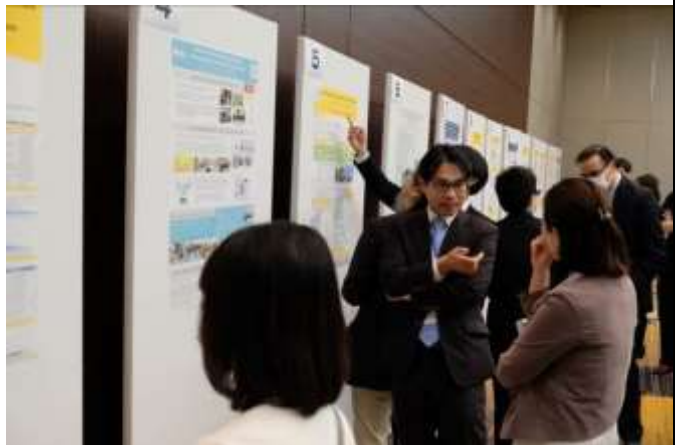
大統領府長官・補佐官との意見交換



首相表敬



「エコプロ 2022」での展示



「ICT2023」での学術発表

### **(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点**

本基金の支援による渡航を通じ、現地の状況をしっかりと把握し、また自由度の高い設計で各種の取組をさせていただくことができた。また、直接の活動である村部での技術協力・意識啓発だけにとどまらず、その周辺で今後の活動につながってくる、政府や国際機関等との意見交換の機会もいただくことができ、将来に向けた活動全体の発展可能性を高めることができた。